

れ、小僧の。此地等へ鳥打遊び御來臨になつたの、直彼家が我
の旦那が家あれば休んでなと行つしやれと云ひなが早くも駈け出
して、下駄を一聞も跳ね飛ばしつゝ、臺所口より駈け上り、突然旦那
様旦那様と急たる聲で呼びつけ、何心なく庭前の菊見て居たる彦右
衛門を驚おせける

第百 めでたしく

おれの御珍しや、不思議の御縁で御眼よのりますと彦右衛門挨拶
すれば、磯貝も調子よく。其後御變りも無うて何より結構御悦び
申しあげまると應答して、導あるまゝ、御門くゞり奥庭入り、
南向の座敷は縁側に腰打ちのけんとする時。まづくお上りなされ
ませ、梅吉何を迂闊々々して居る、御靴の紐を解いてわけぬいと世
馴れたる彦右衛門が接待ぶり、磯貝も庭の石燈籠の古び工合を賞め

なとしあが終局の座敷に上り込み、鐵砲を書生お遞與して、獲物
袋の中より鳩鴉なんど取り出し、おれの一羽に十獲もの苦勞を籠め
て獲りしものおが御土産まわぐるあまは汝より調理して旦那様の
晩御膳に節にあと進ませよと笑ひく、梅吉お與ふるに、彦右衛門も
莞爾つきあが、大した御土産あり難く頂戴いたしますると戯れて
答ふる傍、ね染を呼べと婢女に云ふ間もあふせお母の指揮にて茶
をもつて立出づるお染、挨拶も口の内よて耻おしげは俯伏ける風情
ひとしや美しく、磯貝も今更あふたまりて少しの鼻白みし、老功
の彦右衛門一座を淋しうするやうな事なく、旅館にての事艦よての
事なぞ種々云ひ出してと笑ひ興じ、頓て田舎漢の手料理貴下方の御
口には合ふまじけれどといふを冒頭にして芋鶏胡蘿蔔れ雜煮薯蕷の
け豆腐小松菜のひたし物焼岩魚の煮浸さんどを下物に、食ふていよ

しや美味うまのふせども芳志こうしと充分じゅうぶん見せて酒さけを侑すむるおぞ、傷いたみ入る恐おそ色いろ入るを口くちに之これ云いへど心こころ嬉うれしく、快活こまろ氣けも磯貝いそがひも幾杯いくばいを傾かたむきば、客きやくの機嫌きげんよきに主人しゆじんも満足まんぞくして、互たひに談話だんわ途切とぎるゝ事ことなく、耳熱みみあつくある頃ときと益々ますます膝ひざをすゝめ合あひての浮世うきよ雑談ざつだん、遂ついに漸おそく親したしくなりて其夜そのよと一泊いちぱくの厄介やくがいは磯貝いそがひあづかりけるが、それよりた染そまもも馴なき一家けれものにも親したみ深あくなり、歸京ききやうして後禮のちれい狀じやうに添そへて立派りっぱある餽物くつきものをなせば彦右衛門ひこゑもん方かたにてもまた其その又また酬むかい、書簡てびかの往復かうふくもやゝ繁しげくおしまさりけるが、遂ついに彦右衛門ひこゑもん磯貝いそがひに頼たのみて、磯貝いそがひが朋友ともだちなる彼艦かのせん長ながの手てをもつて荒磯あらいそ大尉たいゐの素性すじやうきゝしに、紛まぎれもあく我が子この新太しんた郎らうが人ひとよ拾ひろひとふれて生長せいじやうたるありければ、天地てんちを拜ほして嬉うれし悦よろこびける彦右衛門ひこゑもんお染そまを我が思おもふ通とほり磯貝いそがひよ歸かへ去まて後のち、額ひたひに汗あせをにじませな

が小生せうせい月つきよての一いち條語ぢやうごを出だし、何卒なにぞ好よき機し會はを得ひて我が子こではありあぶら我が謝罪あやまふねばあらぬ荒磯あらいそ大尉たいゐに面おもてを合あはし、逐おと一いち當たう時じの状あり態まゝを懺悔ざんげあしたき由よしを頼たのめば、磯貝いそがひ且かつつ驚おどろき且かつつ贊嘆さんたんえ、遂ついも或時あるとき荒磯あらいそを引ひき逢あはせぬ、語かたるも聞きくも涙なみだおて彦右衛門ひこゑもんが長々ながくえき懺悔ざんげ、そいろよ六むつの秋あきを濡ぬふまけるが、それより天蒼てんそうく日鮮ひあざめに、頭上かしら一いち點てんの翳かげなく彦右衛門ひこゑもん一いち代だいを終おまけるよまめでたまゝ

いかなと終

明治二十五年三月十五日印刷
全 二十五年三月十七日出版

定價全參拾圓



著作者

幸 田 露 伴

東京市京橋區南傳馬町二丁目十四番地寄留

發行者

青 木 恒 三 郎

大阪市東區北久太郎町二丁目六十六番屋敷
大阪活版製造所印刷部

印刷者

辻 田 榮 助

大阪市心齋橋筋安堂寺町

製本所

青 木 嵩 山 堂

東京市京橋區南傳馬町二丁目

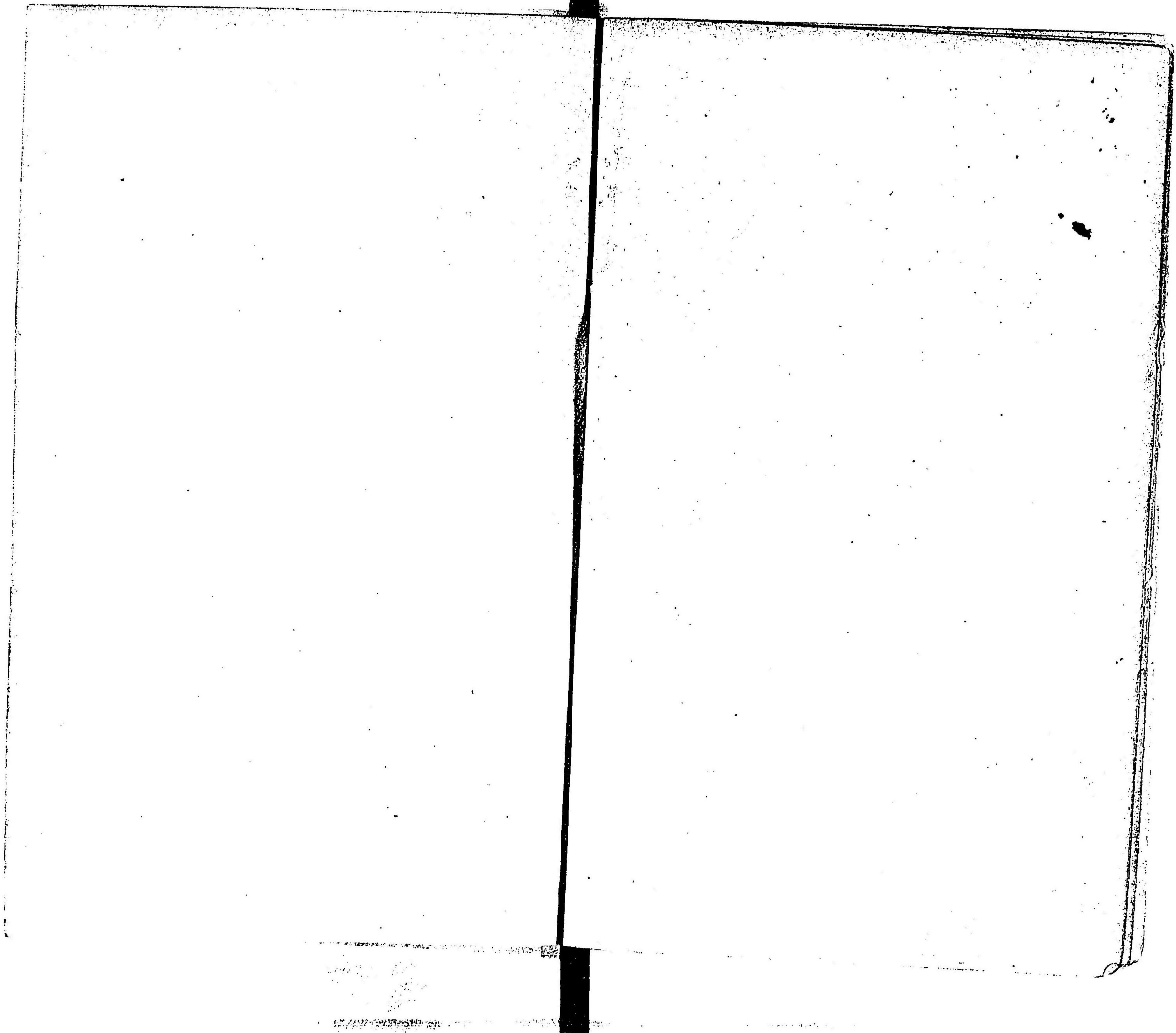
發賣所

青 木 嵩 山 堂

勢州四口市港堅町

全

嵩 山 堂 分 店



68
133

